

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-04-05

【小特集】『星雲』と立石伯：立石伯インタビュー 聞き手：『現代文藝研究』編集部 (藤村耕治／関口雄士)

(出版者 / Publisher)

現代文藝研究会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

現代文藝研究

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

105

(終了ページ / End Page)

122

(発行年 / Year)

2024-04-30

立石伯インタビュー

聞き手…『現代文藝研究』編集部（藤村耕治・関口雄士）



『星雲』創刊まで

——本日はよろしくお願ひします。まずは、創刊のころのお話をお聞かせください。創刊時からの同人である永野隆史さん、石渡康之さんというのは、法政の日本文学科で知り合われたのですか。

はい、永野と石渡には法政の日文で知り合った。年齢でいうと、永野が二つ下で石渡が一つ下で一学年下。初期の同人で法政ではないのは宮内豊だけだ。

——最初期の同人の本柳武慶さんと、松村憲二さんというのは『時間』という雑誌の同人でもあったということですが……。

本柳は前から『時間』の同人だけれど、松村は違う。あとで、石渡と永野も『時間』の同人になった。

——同人で出合いの時のエピソードなどにかあるのですか？ どのようなきっかけで出会われたなどがあればお聞かせください。

どういふきつかけかは忘れてしまったけれど……教室で会ってということではなく、やっぱり自治会をやっていたときじゃないかな。本柳は同級生で詩人だったから、最初は彼と詩や小説の話をしたのではなかったかと思う。

——『時間』という同人誌は北川冬彦が主催していたというんですが。

はい、あと櫻井勝美さんとかね。僕も『時間』に本柳のことを書いたことがある。

——それで、『星雲』の創刊にあたっては石渡さんと永野さんと「やろう」ということになって、本柳さんがあとから加わってというようなことでしょいか。

いや、本柳は発案者の一人……年齢は僕より二つくらい上だった。

——なるほど。それで、どのような経緯で「雑誌を作ろう」

ということになったのでしょうか。

はっきりとは覚えていないけれども、酒を飲んで無駄に時間を潰していたってしかたがないから、文学をきちんとやろうかということ始めたのだと思う。それで、僕が宮内と友人だったから、宮内を引き込んで、六人で発足しようということになった。

——宮内さんは高校の先生の仲介で知り合ったということですが、それはいつごろのことでしょうか？

僕が浪人して東京に来た一九六〇年頃）だね。宮内はそのころ『朝日新聞』の校閲部に勤めていたんだよ。二四時間開いている社員寮に入っていた。彼は僕の三つ上で、僕が米子東高に入ったときに入れかわりに卒業した。それで、渡部兼直さんという国語の先生で詩人の紹介で「東京に行ったら、こんな男がいるから訪ねるといい」……。

——もう少し、石渡さんと永野さんのことをお聞かせくだ

さい。例えばゼミはどこに入っていたか、など。

永野は小田切（秀雄）さんのところだよ。石渡もそうじやなかったかな。

——先生が書かれていた、入学してすぐに小田切先生と討論になった話があつて、卒論を書かなくてはいけなくなつたから小田切先生のところに行かれたという話があります
が、ゼミには……。

小田切ゼミは全く関係ない。当初小田切さんのところに行こうと思つたけれど、そういう事情で行けないなあという
ことで、廣末（保）さんは教養部だったし、廣末さんともちよつと喧嘩してね……。それで、しょうがないから重
友（毅）さんのところに行つた。直接話す機会があつたとき
に「石川（淳）さんの『雨月物語』の新釈はいかがですか」ということを訊いたら、「あんなもんは学者じゃないし、物書きのものだから大したものじゃない」って言われ
てすぐゼミをやめた。だが、ゼミの単位を取らなきゃ卒業
できない……：しょうがないからどこ行こうかってね（笑）。

それで、表（章）さんのところで能でもやるかって。まあ、単位はもらったね。

だけど、卒論があるということで、小田切さん以外で石川淳で書いて見てもらえそうな人でいうと、猪野謙二さんが神戸大から来ていたんだよね。それで授業が終わつたのを見計らつて教室に行つて「卒業論文を石川淳で書きたいんだけども見てもらえますか」と言つたら、「いや、小田切さんがいらつしやるでしょう」と答えるから、「いや、ちよつと事情があつて」って……：そうしたら「じゃあ、神戸大に井澤義雄君がいるから」っていうけれど、よその大学の教員に卒論を見てもらうなんてとんでもない（笑）。

それで、小田切さんにとつたことになつただけけれど、小田切さん、その時は総長代行やつていらつしやつたから、手紙を書いた。そうしたら「何月何日何時に総長室にいらつしやい」と返事をもらった。「総長室に行つて話をするのか」って……（一同笑）。「石川淳の『白描』で卒論を書きたい」という話をしたら「いいよ、見てあげるから、好きなことを書いていらつしやい」って。懐の深い人だね。

——それで、その頃に創刊同人の六人で雑誌をやるうとい

う機運が高まってきたわけですね。

そう、それで誌名を六人で出しあった。僕が『星雲』と、ほかになんだったかな、たしか『アンドロメダ』とか出したんだよ。多くの中から皆で選んでいって、最後に残ったのが『星雲』と、宮内の出した『狙撃者』っていうので：（一同笑）。『狙撃者』って、それは過激だぜ」っていうことで『星雲』に決まったんだ。

——そのころの同人がもっていた問題意識などは、当時の編集後記などで割と書かれていて、やはり既成の文壇とか文学の世界が停滞しているように感じられたり、生ぬるいものであるように感じられたりしたので、自分たちはまったく違う問題意識で文学をやりたいということではじめられたというようなことだと思いますが。

そうなんだ。わかりやすいことではえば、いわゆる『近代文学』派の文学が沈滞期だった。埴谷（雄高）さんが、ようやく『闇のなかの黒い馬』の連作を書きはじめるころで、石川さんもずっと長いものは書かないでいたのが「荒

魂」を書き「至福千年」に至るころかな。それであまりパツとしない。私小説作家や第三の新人が跋扈しているし、これは面白くもなんともないなという……そういう状況だったんだよ。

——そのころといえば、梅崎春生が亡くなったのが一九六五年で、小島信夫の「抱擁家族」がやはり一九六五年です。そのころの文芸誌の目次などを見ても、それ以前の文学から変質してきているようなところがありますね。とはいえ、その少しあとからは、戦後派の作家が晩年の良い作品を書きはじめる時期でもあります。だから、そうした状況に一石を投じる気運のようなものが醸成されていたとはいえますが……。

はい、でも椎名（麟三）さんもずいぶん変わっちゃうし、武田（泰淳）さんも色々書いているけれども、あの頃はパツとしたものがない。もちろん、坂口安吾もとつくに死んじやっているからね。

——『星雲』は一九六六年五月に創刊号が出ています。こ

のときに先生は修士課程の一年目だったので、学部の卒業前から準備を進めていたということですね。

そうそう。卒業論文と並行して進めていた。

——『星雲』の第五号に「石川淳『精神の悪運』——『白描』の削除の一説に関連して」という文章が載っています。先生の卒業論文は「石川淳『白描』論」ですが、なにか関連はあるのでしょうか。

まったく別のものだね。韓非は遊説論を書いているが、遊説しながら毒殺されてしまう……そういう、思想家としての自己の論理と実際のな行動とのバランスがとれていたのかというのが、僕の韓非論としてある。その論理の綾を「自ずから脱する」という『自脱』の論理をもう少し少し展開しておきたかったということだ。

石川さんの戦中の問題というのは、「普賢」「マルスの歌」「白描」など戦争、政治、マルクス主義批判など皆、関連しているんだね。石川さんは、直接書かなかったにせよ、読者にわかるようなかたちで論理化してほしかったなとい

うところがあつた。それを『精神の悪運』というかたちで、政治や精神や時代のなかの悪運というものをどうやって顛倒するか、そのところを考えなくてはいかんぞという……そこをね、ああいう蕪雑なかたちで書いたんだ。

初期『星雲』について

——『星雲』の印刷について、初期は千曲タイプ社、判型が変わってからはずっと谷川印刷KKがおこなっています。依頼の経緯などはどのようなものだったのでしょうか？

千曲タイプ社は自分達で探し、自分達で三〇字×二五行の原稿用紙を用意して、目の前で打ってもらっていた。校正が面倒だったけれど、見落とすわけにはいかなかった。消すのも大変で、文字を消したら、打つ人に気の毒だしね。おまけに行送りができないんだ。それで、皆が一緒でなければ、頁がズレてしまったりしたら成立しないんだよ。だから、とにかく大変だった。実際はそのあと酒を飲むから

ね（笑）。そうした不便さがあつた。

谷川印刷は、同人の誰かが知っていて紹介されたんだよ。それに、印刷費が比較的安かつたからね。

——六号の再編後から、表紙の絵は一貫して石原靖夫さんのものを使われていますが、どのような経緯があつたのでしょうか。文学のほうでなにか関係があつたとかいうことでしょうか。

いや、そういう関係ではない。石原君は、永野が京都で高校に通っていたところからの同級生で友人だったから、そのつながりだ。

この表紙の絵は星雲であると同時に『往生要集』の地獄の炎なんだ。題字も石原君によるものだよ。彼はね、藝大で絵画をやっていて、テンペラ画では日本でトップの人だ。

——インターネットで調べると、イタリアに留学される前に『星雲』のデザインをやられているみたいで、最初期の作品になるようですね。本当にいい表紙です。

さて、編集後記を読むと「読者の批評を乞う」というよ

うなことを何度も書かれています。が、献本や頒布（販売）はどのようにおこなっていたのでしょうか。

外部からの批評は全くきたことがなかつたね。献本は埴谷さんとか、知っている人には送っていた。共通で何十人か送り先を決めて、あとは個人で送りたい人に送るといふようなスタイルでやっていた。共通の送り先は物書きが多かつたな。大江（健三郎）さんとかね。

頒布は、一時は書店に置いていたことはあるけれども、だいたいは返ってきていたから、もう止めようかということになった。置いていたところは、永野や石渡が大きい本屋、紀伊國屋なんかを持っていったな。

——判型が変わってからは、部数はどれくらい刷っていたのでしょうか。

三〇〇部くらいかな。五〇部くらいを本屋に置いて、五〜六人だから一人が三〇部くらい受けとって共通の献本リスト以外の献本に当てていた。国会図書館と近代文学館にも納めているね。

—— 献本をした人からの反応などはどのようなものがありましたか。

ない、ない（笑）。

—— 少し話が変わりますが、そのころ永野隆史さんが『薄明』という詩集を星雲社から出版しています。その刊行の経緯についてお話を聞かせてください。

本柳が前に詩集（『時間37人集』時間社、一九六〇）を出していたんだよね。それで、永野と石渡も詩集をきちんと出さないといかんねとなつて、せっかく星雲社という出版社形式をとっているんだからということで、永野は『星雲』に載せた詩をまとめて出したんだ。まあ、自費出版に近いかたちだね。高橋和巳たちが「対話叢書」というのを出そうとしていたが、だいたいそんな感じだ。

石渡の本も出したかったんだが、突然亡くなっちゃったからね……それで、『星雲』の追悼号（二七号）に、『星雲』と『時間』に載った詩をいくつかセレクトしてまとめたん

だ。あれを読めば石渡の詩業の足跡そくせきがだいたいわかるようなものにしたかった。

—— 先生は、最初は評論や批評ではなくて、ご本名の堀江拓充名義で「館」という小説を発表されています。その後もずっと小説を書きつづけて、『星雲』に掲載したものでいえば「旅立」「朔風」、それから『西行桜外伝』のうちの二編、個人編集になってからも「古里を求めて」を発表しています。このあたりについてお聞かせください。

批評を書くのと違って、小説はそんなに勉強しないでいいしね。

『星雲』が一年に一冊出ればいいっていう雑誌だから、現実的テーマで書くことが難しかった。年四回くらい出ればもっと『星雲』に載せられたが、ひどいときは一年半、二年と空くこともあったからね。最初は四ヶ月に一回くらいは出していたけれど。

—— 編集後記を見ると第一期のころは読書会をやられていたようですが、どのような感じだったかお聞かせください。

報告者を決めてやっていた。あのころ石川さんの「荒魂」が出たから取りあげたね。あと、モーリス・ブランショとか……ドストエフスキイの「未成年」もやったな。何時間もやって激論また激論だったよ。

「荒魂」は相当議論が紛糾したな。石川さんの小説はやっぱり好みがあるから「こんなウソ話なんて」「ウソがおかしいよ」とか、そういうところから始まった。

なにしろ、ブランショなんて書いてあることがわかり辛いんだもの……「これ、何だ?」「堀江のわからない小説より、もっとわからないぞ」みたいな(一同笑)。

——宮内さんは第三号でブランショの翻訳をやられています。アテネフランセにも通われていたということ、フランス語もできたということでしょうか。

宮内はフランス語が上手だったね。

——それで、終わったら喫茶店から酒場へ……。

それはもちろんだ(笑)。

『星雲』の再建について

——『星雲』は第六号をもって「ひとつの区切りをつける」ということで、休刊となります。ところが一年半ほどで再刊というかたちになります。このころから、のちに続く私たちで、先生、永野さん、石渡さんの三人になりました。このあたりの事情について、お聞かせください。

『星雲』を再建するにあたっては、おおざっぱに言えば、再刊当時に石渡が巻頭言で書いていたように、創刊当時にあった問題意識や緊張感をあらためて見なおして、そのうえで再出発しようということだ。

僕が残念だったのは、本柳は良い詩人だと思っていたけれど、いくら慰留しても辞めてしまったことだね。

——再建にあたって、エピソードとして覚えていらっしゃることはありますか？

うーん、あまりないね。「館」を書きつづけたって、こんなの誰もわかるはずないじゃないかと言われたことくらいかな（笑）。

——「館」はたしかに難解な小説でしたからね（笑）。しかし、第六号の休刊時に宮内さんは「（引用者注：『星雲』第一号から五号までの文学的成果としては）わずかに堀江拓充君の難解な長篇小説に、みずからの主観性にどこまでも忠実たらしとする意志の持続が窺えるだけで、あとは何やらてんやわんやの行列があっただけではいか」と高く評価されています。

まあ、やっぱり同人雑誌というのは難しいものなんだよね。反響もほとんどなかったしね。あとは、第六号を出す段階で活版印刷になって、せっかく校正など色々なことが楽になったけれども、それで皆が書かなくなっちゃったような変なこともあったね。

——再建後は、だいたい年一回のペースで出ていまして、第九号が一九七一年七月に出ています。この第九号で一度、

一瞬だけ石渡さんが「一身上の都合により同人から退くことになった」と脱退されていますが、これはどのような事情があったのでしょうか。

ああ、彼が四つ木あたりの小さな町工場の経営者一族だったからね、人手不足でたいへんだからということだね。石渡捻子って、ネジ屋をやっていたんだ。それで、機械操作の資格をとったりしなくてはいけなくなって一時脱けることになったんだ。

——第九号と『埴谷雄高の世界』が同年同月に出ています。一九六七年に宮内さんが群像新人文学賞（評論部門）を受賞したり、先生が著書を出版されたりということ、『星雲』同人が世に出た時期といえます。『埴谷雄高の世界』は修士論文を前半部分に、『星雲』に発表した論を後半部分に収録しています。そういうことで、同人から反響などはありましたか。

ないね。「闇のなかの黒い馬」は批評するのが難しいからね。読んでもよくわからないし、わかったとしても、合

評会を開いたり色々な意見を戦わせるとというのがなかなか難しい作品だよ。

中期『星雲』について

——『星雲』から少し離れた話題ですが、立石伯の文学についてということでお訊きします。『埴谷雄高の世界』『高橋和巳の世界』の刊行はどのような経緯があったのですか。

『埴谷雄高の世界』は小田切さんが橋中雄二さんという講談社の編集者に紹介して下さって出すことになったんだよ。当時は小田切さんがそのように学生の原稿を出版社に紹介して下さることがあったからね。

『高橋和巳の世界』は『星雲』の第九号に高橋和巳論（「行為と認識の挫折——高橋和巳小論」）を書いたら、それを橋中さんが読んで「書いてくれ」ということになった。そういうわけだから、四、五ヶ月で書いたものだ。没後一年でそういうものを出すというのは、橋中さんが高橋さんをちよつと応援しなかったのではないかな。河出がずっと高橋の本を出す中心になっていたけれど、講談社も高橋和巳を見捨てていないぞ、というようにね。

——第一〇号から小笠原賢二さんが加入して、のちのちまで続く同人四人体制が完成します。小笠原さんは小田切ゼミですが、どのようなきっかけで交流が生まれたのでしょうか。

小笠原との付き合いは、大学ではなくて、『週刊読書人』の書評を頼まれたからはじまったものだよ。あの当時は原稿を渡したら、そのまま酒を飲みに行くだろう（笑）。それで、話していたら「小田切秀雄のゼミだ」って話になってね。

——小笠原さんが新規の同人として加入することになったわけですが、ほかに加入希望者があったり、同人を拡大しようということなどはなかったのでしょうか。

なかったね。同人が多くなるとたいへんだから。『星雲』規模の雑誌でいえば、せいぜい四〜五人なんだよ。

たとえば『VIKING』は大きい同人誌だけれど、そ

うなると商売の世界になってくるからね。『VIKING』は高橋和巳が入っていたり、月村敏行も吉本隆明論を書いていただろう。ああいう風に全国から原稿を集めて、それを編集してということになると、同人雑誌としてそういうのは適切ではないなと思っていたんだ。

——なるほど。ところで特集などは別として、同人以外の寄稿などはありましたか。

それもなかったね。そういう意味でいえば、実に閉鎖的な雑誌だったな(笑)。

——それでは、小笠原さんほどのような経緯で加入することになったのでしょうか。

小笠原が小説を書いているということだね、「それならお前も入れよ」というようなかんじだったかな。小笠原も法政の日本文学科だったから、そのつながりもあるな。

——そうすると、そのあとで、法政の日文や小田切ゼミで

「同人になりたい」というような人が出なかったというのは、少し意外な感じはしますね。

話は違うが、小田切さんで思い出したことがあるな。『星雲』の第一一・一二号に載せた「旅立」っていう癌や死をモチーフにした小説があるだろう。『星雲』は小田切さんにはもちろん贈っていたけれども、あの小説を小田切さんが読んで「堀江君……奥さんは大丈夫かい？」ってね(一同笑)。あの人は私小説読みでもあるからね。

——小笠原さんの加入までは、先生が小説と批評、永野さんと石渡さんが詩というかんじだったのが、加入後は小笠原さんがコンスタントに短篇小説を発表しています。それで、バランスがよくなったかなということがあります。ところで、このころには初期にあった読書会や合評会というようなものはなくなったのでしょうか。

そうだね、雑誌が出たら酒を飲むだけだ(笑)。飲み屋に行って会費をあつめた。

——会費についてももう少しお聞かせください。

雑誌の発行にかかわるお金を、作品の掲載の有無に関わらず、皆で均等に割って出すというやり方だったね。

——『星雲』第一五号が出たあたりで、先生は法政大学の専任講師に就任しています。とはいえ、『星雲』自体は一年に一冊コンスタントに刊行されています。

年刊雑誌ではコンスタントなんてもんじゃないよ(笑)。僕は書くことがいっぱいあったけれど、本が出ないんだもの。やっぱり、締切はいつまでということがあっても全員が書かないからね。「いくらなんでもこんなに出なくてはマズいぞ」という段階になってようやく原稿が集まるような感じだったよ。

——このころから編集後記で常に「またこんなに長くかかってしまった」というような文章が載るようになり、第一九号では半年で新しい号が出せたことを「画期的」「樁事」と書かれています(笑)。ところで、この時期から法政大

学で専任講師になられたということ、生活もだいぶ変化があったのではないでしょうか。

そうでもないね。着任したばかりのころに小田切さんから「君は「世界文学のなかの日本文学」とか、そういう感じでやっているんだから、多角的に書かなくてはいけないよな」というようなかんじで言われていたので、楽だったよね。

その前に埴谷さん、高橋さん、武田さん書いていたからね。あと、石川さんをやろうとしていたけれど、ほんとうは坂口安吾もやりたかった。一〇〇枚から一五〇枚くらい原稿があったんだけど、なかなか『星雲』が出ないから捨てちゃったんだよね。

——この時期の『星雲』は概ね年一号のペースで出ていて、二五号までそれが続きます。

そう、だから「西欧遊記」の連載が二四号からだったんだけれど、途中で方針を変えざるをえなくなったんだよ。最終回が何年も経ってから出るなんて、そんなバカなこと

があるかってね（一同笑）。

——「西欧遊記」は連載期間が一三年にわたるのですが、最後はものすごく駆け足で「昼飯に鉄火丼などを食い、一時十分のリムジンで新宿西口に。四時前、家に無事着、五ヶ月ぶりなり」で終わるんですよ（笑）。

そうした長期連載のことに関連していえば、「朔風」は『星雲』連載版から、単行本にするにあたってだいぶ手を入れられていますね。これはやはり、連載中に考えていたことと、少し時間が経ってから考えていたことで、変化があったりしたということでしょうか。

まあ、そういうことだね。

——しかし、『星雲』に載せた作家論などは、法政の通信教育部の教科書に入れていますが、そちらにはあまり直しはありませんね。

批評は直しようがないからね。小説は章題や順序などを変えちゃったりするけれども。批評が直しにくいのは「あ

のときウソ書いたのか」ってなっちゃうからだ。

——法政大学の教員になってから、同僚に『星雲』を配ることはありましたか。

あまりなかったね。でも、勝又（浩）さんや佐川（誠義）さんには渡していたな。

——また『星雲』の話から少し離れてしまうのですが、大学の教員紹介では「堀江拓充」と同時に「筆名…立石伯」ということで紹介されています。学生のほうでは、批評家・立石伯というのをどれくらい意識していたと思われませんか。

ほとんど知らなかったんじゃないかな。以前、齋藤慎爾くんが書いていたが、「立石伯のほうで認知していた人間は堀江といわれてもピンとこないし、堀江のほうで認知していた人間は立石伯の活動についてほとんど知らなかった」ということだね。

——僕(藤村)も高橋和巳を研究しようと思っていた時『高橋和巳の世界』を見つけて、『日本文学誌要』は立石伯名義で書いていたので、「お、これはウチの大学の堀江先生ではないだろうか」という感じでした。以前、政法大学の第二教養部について、ドストエフスキーをやられていた近田友一先生とお話をしたとき「あなたのところの師匠は誰なの？」と訊かれて、「堀江先生です」と答えたら、「何をやっている人なの」と仰るから、『埴谷雄高の世界』とか『高橋和巳の世界』を書いていきます」と返したら、「あれって立石伯じゃないの？」っていうこともありました(笑)。

まあ、学生のほうでもあまり認識していなかっただろうからね。ゼミ生は読む読まないはともかくもちろん知っていたでしょう。そういうことで、就任してすぐの年の大学祭で、学生から現代文学に関する催しをしたいという相談を受けて、秋山駿・月村敏行・畑山博を呼んでシンポジウムをしたというのはあったな。

——ともあれ、この時期の『星雲』において先生は、武田泰淳やドストエフスキーに関する評論もありますが、やは

りメインとしては「朔風」を発表する媒体になっていました。

小説はやっぱり、いざ書こうとなると書きやすかったからね。

——「館」から「古里を求めて」まで読んでいきますと、非小説というか、いわゆる「小説らしさ」を追求しないところが立石伯の小説の特徴としてあると思いますが、そのなかでは「朔風」は小説らしい小説になっています。そのあたりについてお聞かせください。

「館」があんまり評判が悪い、誰もわからない小説になっちゃったからね(笑)。やっぱり日本の小説の土壌は、私小説的なものが骨がらみになっているんだよ。それで「旅立」も書いてみたけれど、同じ流れで「朔風」もその次に書いた小説だからね。

後期『星雲』について

——『星雲』は二五号までは大体、年に一回出ています。

それが二六号になると、二五号の一九八七年九月刊行から間が空いて一九九〇年一月の刊行になります。このころ先生は『石川淳論』をオリジン出版センターから出されています。二七号は二年空いて、石渡康之さんの追悼号になります。こうした刊行ペースの変化について、お聞かせください。

九〇年ごろ、僕は文学部長をやっていたからね。色々な仕事が多なる時期だった。

石渡も体の具合を悪くしていたし、「もう止め時かな」という感じが同人間にもあった。

——石渡さんの追悼号で先生が書かれている文章は、追悼文でありつつ、石渡康之論になっており、しっかり残しておきたい文章だと思います。この追悼号に寄せられているほかの追悼文も『星雲』の精神や当時の青春の像がよくあらわれたものになっていますね。

なるほど、そうかも知れないな。

——小笠原さんが「特に忘れられない思い出」として、新宿の飲み屋で井上光晴さんと『星雲』同人が鉢合わせたときに、どういうわけか石渡さんと井上さんが相撲をとった話というのを挙げられています（笑）。

そう、井上さんは腕相撲で負けたので、店の外に降りて行って、石で描いた土俵を作ったね（笑）。あのころは、そんな非常識な行動が結構多かったんだよ。

井上さんは文学伝習所をやっていたり、瀬戸内寂聴さんとのことがあったり、色々あったからね。

——二七号以降は、少しずつ刊行のペースが落ちていき一年半に一度になります。この時期、『朔風』がオリジン出版センターから出ます。それで、九七年二月に埴谷雄高さんが亡くなって、三〇号が埴谷さんの追悼号になります。

小田切さんの追悼号（三二号）があとに続くね。埴谷さんの号の秋山さんとの対談や、小田切さんの号の三人の鼎談は大酒飲みながらワアワアやったね（笑）。

秋山さんとは、番町書房の『作家の世界 埴谷雄高』（一

九七七年）以来の古いつきあい、さつき言った大学の催しに来てもらった。だから、秋山さんには「こういうことをやりたいんだ」と電話をして来てもらった。あの対談は多角的で余りいわれていないことにふれた対談だけれど、どこかへ再録したり転載したりは秋山さん没後で難しいね。

——この三〇号は、埴谷雄高を研究する人間には重要な資料だと思います。しかし、こうして見てみると、この中でも鬼籍に入られた方が多いですね。このなかの伊東聖子さんについて少しお聞かせください。

伊東聖子さんは、さつき井上さんの話で出てきた新宿二丁目の「詩歌句」という飲み屋をやっていて、ここでは『死霊』とワイトゲンシュタイン／カントをめぐる手稿」を書いていくけれどね、まあそういう面倒なものを書く人だ。

あの人は武蔵野市に住んでいたから、埴谷さんの家がなくならないことを知ってなんらかのかたちで残したりできないかということ、二人で役所や市議会の議員に話に行ったりした。埴谷さんの記念館ということで難しければ、あのあたりには竹内好さんや丸山眞男さん、ほかにも色々な人が

いたから、そういう昭和の文芸・思想界の中核になった人たちの文化施設を作ったら、武蔵野市は文化都市として尊敬されるよって（笑）。

——この号に書いていらっしやる、齋藤愼爾さんについても、少しお伺いしたいと思います。齋藤さんとおつきあいが始まったのは、いつごろのことになりますか。

七〇年代の終わりくらいになるかな。僕が法政大学に着任してすぐくらいだった。埴谷さんを介して知り合ったんじゃないかな。『太陽』だったか『鳩よ!』だったか……彼が埴谷さんについての特集を編集する時に原稿を依頼されたのが、編集者としてのつきあいはじまりだったかな。もしかすると『ユリイカ』の埴谷雄高特集のとき（一九七八年）だったかも知れない。（後注：『埴谷雄高・吉本隆明の世界』に齋藤さん撮影の埴谷、井上、島尾（敏雄）、立石などの写真あり。八〇年一月のもの。）

——この号は重要な資料ということで、どこから反応はあったりしたのでしょうか。

ないな。知っている人もどれほどいるかね。

小田切さんの号も知られていなかったよ。小田切秀雄研究会で清水（節治）さんに、その号を渡したら「いやあ、こんなものがあつたんですね」なんてね。

——三三号を一四年ぶりに刊行して、第一期の終刊号となります。

結局ね、終刊号を出していなかったから。終刊号を出すことで『星雲』の役割はひとまず終わったということを引きちんと示したかった。

——三三号の目次に、先生と埴谷雄高さんの写真がありますが、あの写真はいつごろのものなのでしょうか。

いつだったか……埴谷さんがまだ酒をあれくらいは飲んでいらっしやるからな……。

——僕（藤村）はあの感じの先生をよく覚えています。髭

が黒くて、色付きのメガネがちょっと恐いという感じの（笑）。だから、八〇年代後半から九〇年代前半くらいじゃないかと思えます。

そうだな、八〇年代だったと思うよ。埴谷さんは、飲んでいる酒で年代がわかるところがあるんだ。有名なハンガリーのトカイワインも、ヨーロッパにいらっしやっつて以降だね。貴腐ワインで甘つたるい、酒ともいえない砂糖水みたいなやつをね……（笑）

——この終刊号の文章は『「死霊」の生成と変容』として、のちに深夜叢書社より単行本が出ています。先生は『星雲』はもちろんですが、『日本文学誌要』や大学の紀要に書かれた文章でも、最終的には何らかのかたちで単行本にされています。

まあ、そうだね。そういうことでいえばね、『埴谷雄高の世界』を出してすぐ、『國文學』だったか『解釈と鑑賞』だったかで埴谷雄高特集をやったときに、僕は断つたんだ。単行書できちんと書いているのに、また、レベルを下げて

薄くしてどうするんだということだね。それ以来、僕は頼まれても書かないと編集者たちに思われたろうね（一同笑）。だから、ほとんど無駄なものを書いていないんだ。書評はしようがないから付き合っただけだね。本数にするに驚くほど多い。とにかく、自分が書きたい文章だけを書いてきたという意識はあるな。

——当時の書評を読むと、中上健次とか武田泰淳とか、いま読んでも、そのエッセンスをよくつかんだ面白いものが多いところもあると思います。

まあ、とはいえ書評は書評だからね。短文であまり論争したりはできないから。

——単行本に未収録のものでいえば、あとはエッセイ的なものですね。「西欧遊記」のような文章や音楽を題材にした文章は、まとまったかたちで読めるようにしたいですね。

そうか。

——しかし、なんといっても、宮内さんが書いていたものが、やはり持続する、継続するということは先生の凄ところですね。一人でも『星雲』を続けるということで、書きつけていらっしやいます。そのなかでも重要なのは「随感録」という新しいスタイルです。第一次『星雲』では時評的なものは扱わず、普遍を目指すようなところがありました。とはいえ、「随感」というのは、それこそ魯迅の「雑文」であったり、ドストエフスキの「作家の日記」であったりというような、狭い枠組にとらわれず、文学を背骨にしながら現在の状況について自分なりに考えるということでもあります。

はい、だからあのあとに書いた五篇ほどの「随感録」も早いうちに本にまとめたという考えはあるんだ。

——刊行を楽しみにしています。今日はありがとうございます。

（二〇一三年一月一五日 於：新宿「珈穂音」）